

# 第1章 大学授業における学習者と教授者の 主体的参加支援

伊藤 秀子

# 大学授業における学習者と教授者の主体的参加支援

## How to promote active participation by learners and instructors at universities

伊藤 秀子

Hideko Itoh

メディア教育開発センター

National Institute of Multimedia Education

概要：本研究の目的は、学習者と教授者の主体的参加による大学授業の改善を支援する方法を明らかにすることにあった。対象は、3大学院7クラスの授業の受講生68名と担当教師1名であった。授業では、学生も教師も学習、教授、評価を体験した。主体的参加を支援する方法として、ビデオ記録による自己モデリングと、自己効力と自己評価に関する調査への回答による意識化の2つを用いた。学生や教師を対象とした授業に関する調査結果から、これらの方法が授業改善の支援に有効であることが明らかにされた。

### 1. はじめに

1991年の大学審議会の答申と大学設置基準の改訂をきっかけとして、大学教育の内容・方法の改善への関心が高まってきた。全国の大学で教育・研究に関する自己点検や自己評価が行われ、制度や組織面の改革が進められた。

一方、大学教育の日々の営みである授業については、体系的な研究や組織的な研修活動は十分行われていなかった。特に、教授学習過程を直接対象とする研究は、初等・中等教育の授業については多くの蓄積があるが、高等教育においては未開拓の分野であった。

先駆的な研究としては、名古屋大学教育学部（安彦、1991）の例があげられる。ここでは、講義法による授業を録画し、教育学の専門家集団が分析し、授業の問題点について具体的な討論を行っている。また、和光大学授業研究会では、長年にわたり大学教員同士の授業参観と検討会を行いその成果をまとめている（和光大学授業研究会、1996）。

最近では、京都大学高等教育教授システム開発センターにおける一連の公開実験授業があげられる（京都大学高等教育教授システム開発センター編、1997；2001；2002）。

その後、高等教育の授業研究と実践に関する研究は徐々に増えてきた。日本教育工学会全国大会では、高等教育における授業研究のセッションが設けられるようになった。日本心理学会全国大会や日本教育心理学会総会でも、大学の授業研究に関するワークショップやシンポジウ

ムが行われている。この他にも、大学の授業改善を念頭においた著書が出版され始めている（たとえば、R. J. スターンバーグ編著、宮元・道田編訳、2000；藤田編著、2003；教養の心理学を考える会編、2003など）。

筆者は、メディア教育開発センター（旧放送教育開発センター）で、3つの共同研究、「教授学習過程の映像化による大学の授業改善の研究」（主査：1993年度、藤田恵璽；1994-1995年度、伊藤秀子）、「メディア利用による大学の授業改善の研究」（1996年度、主査：伊藤）、「メディアを利用した学習方法の最適化に関する研究開発」（主査：1997 - 2000.9、大塚雄作；2000.10 - 2001.3、伊藤）に携わってきた（伊藤、1995；1996a, b；1997a, b；伊藤・大塚、1999）。

これらの研究の特色はつぎのような点にあった。

- (1) 大学の教授学習過程を直接研究対象とする。
- (2) 教授者が自らの授業を研究対象として工夫・改善することを出発点とする。
- (3) 互いに情報交換を行って授業をより良いものにする。
- (4) 教授者と学習者がともに授業を評価し、改善を考える。
- (5) 教授者の実践だけにゆだねられてきた大学の授業について、基礎となる理論や方法論を研究する。

これらの研究プロジェクトを通していえることは、“より良い授業は学習者と教授者の主体的参加から”ということであった。また、研究の成果は、メディア教育開発センターの研修事業「自分の授業を振り返る」に応用され、多くの参加者を得た（伊藤・大塚、1999；三尾編、2000；2001a；2001b；2001c）。

以上より、このようなbottom upのアプローチこそが、大学改革の真の推進力となると確信した。

プロジェクトの研究成果と基本的理念は、現行のプロジェクト「メディアFDとフレキシブル・ラーニング支援の研究開発」（2001 - 2003年度、主査：佐賀啓男）の下位組織「学習評価支援フォーカスグループ」に継承されている。

フレキシブル・ラーニングとは、個々の学習者のニーズに基づいて、学習者自身が、学習内容、時、場所、方法をコントロールしていくアプローチである（Johnson, 1994；Taylor *et al.*, 1996）。

メディアと情報技術（IT）の著しい発展により、これらが高等教育にも導入され、これまでになかった柔軟で多様な教育方法と学習形態が可能になった。そこでは、伝統的な講義形式の授業で起こりがちだった受身的な学習ではなく、主体的な学習が重要となる。したがって、それを支援する研究と実践がますます求められるのである。

このような視点に立って、本稿の2. では、筆者がこれまで大学院の授業で行ってきた学生参加型授業の実践例を紹介する。これらの授業は、学習者も教授者も授業への参加を通して学習、教授、評価を体験し、参加者全員による“学びの共同体”が形成されるように設計されていた。このように、学習者と教授者の主体的参加を扱った授業実践についての実証研究はほとんど行われていない。最後に、3. では、今後の展望についてのべる。

なお、本稿では、用語についてつぎのような区別をしている。

“学生（受講生）”、“教師（講師）”は、属性を表す際に用いる。一方、“学習者”、“教授者”

は、役割をあらわす際に用いる。なぜなら、下記の実践例では、“学生”も“教授者”となりうるし、“教師”も“学習者”となりうるからである。

## 2. 授業実践例

大学授業の改善に学習者と教授者が主体的にかかわっていく方法として、つぎの2つを用いた。ひとつは、ビデオによって授業の実際の場面をとらえ、教授者の自己モデリング (self-modeling) の手段とすることであった。モデリング (modeling) は、他者の行動を観察することによる学習である (Bandura, 1965)。しかし、今日では、メディアを利用して自己を客体化することができることから、自己モデリングという学習形態が考えられるようになった (Bandura, 1986)。つまり、学習者が自分をモデルとして、良い点を伸ばしたり、悪い点は修正したりできるのである。“人の振り見てわが振り直せ”から“自己の振り見てわが振り直せ”への発展である。

もうひとつは、調査への回答による意識化であった。調査は、自己効力 (セルフ・エフィカシー; self-efficacy) に関するものと、評価に関するものから構成されていた。これらによって学習者と教授者が自己の学習・教授活動をモニターし、問題点を焦点化し、改善への手掛りを導くと考えられた。

自己効力は、あることを達成するのに必要な一連の行為を体制化したり実行したりするための、自分の能力に対する確信である (Bandura, 1997)。これは、人間の思考、情意、動機づけ、行為に強く働きかけて自己を方向づける機能をもっており、個人が力を発揮するのに中心的な役割を果たすとされている (Bandura, 1986)。

評価は、教授活動の自己評価、学習者による教授活動評価、学習活動の自己評価からなる。

このように、自己モデリング、自己効力、および評価は、学習者と教授者が授業改善に主体的にかかわっていく手段であると同時に指標でもある。このことは、すでに、伊藤が自分自身を対象として行った研究でも確かめられている (Itoh, 1992; 伊藤, 1993)。伊藤 (1996c; 1997c) は、大学授業における学習者や教授者の自己効力について研究している。また、伊藤他 (2001; 2002) は、プレゼンテーションの改善における自己モデリング、自己効力、自己評価の有効性を明らかにしている。

### 2.1 目的

学習者と教授者が自らの授業を研究対象として工夫・改善していく過程を分析する。これにより、授業への主体的参加を支援する方法を明らかにする。

### 2.2 対象

対象は、3大学院7クラスの授業の受講生68名と担当教師1名 (筆者) であった。表1は、授業コード、対象学生の所属、実施年度、授業科目名、および人数を示している。

表1 授業コード、対象学生の所属、実施年度、授業科目名、および人数

授業コード	大学院名	実施年度	授業科目名	人数
W1998	W大学	1998	学習教授評価特論	14
W2000	W大学	2000	学習教授評価特論	10
W2002	W大学	2002	学習教授評価法	20
C2000	C大学	2000	人格発達特論	8
T2000	T大学	2000	マルチメディア学習論	4
T2001	T大学	2001	マルチメディア学習論	6
T2002	T大学	2002	マルチメディア学習論	6
合計				68

## 2.3 調査項目と実施手続

調査項目と実施手続はつぎのとおりであった。詳細は、付録1-3を参照。

### 2.3.1 教授者調査

- (1) 教授者調査I (授業前)：本時の学習目標、授業の工夫点、教授活動の自己効力 (遂行の確信度)
- (2) 授業実施・ビデオ記録
- (3) 教授者調査II (ビデオ視聴前)：教授活動の自己評価、教授活動の自己効力 (遂行の確信度)
- (4) 教授者によるビデオの自己視聴
- (5) 教授者調査III (ビデオ視聴後)：ビデオの自己視聴結果、教授法への影響要因、授業改善の方法、教授活動の自己効力 (遂行の確信度)、自由記述

教授者調査の対象は、担当教師と課題研究発表者であった。

### 2.3.2 学習者調査

- (1) 学習者調査I (コース開始前)：学習活動の自己効力 (遂行の確信度)
- (2) 学習者調査II (授業後)：教授活動の評価、学習活動の自己評価、学習活動の自己効力 (遂行の確信度)

学習者調査の対象は、課題研究発表者以外の学生と教師であった。

学習活動と教授活動の自己効力と自己評価はそれぞれ10項目からなり、内容が対応していた。表現は、自己効力では未来形を用い、自己評価では過去形を用いた。学習活動の自己評価と教授活動の評価のうち、6-10の5項目は内容が対応していた。自己評価尺度は4段階 (1-4)、自己効力尺度は11段階 (0-10) であった。

## 2.4 課題研究発表

授業では、学生の関心テーマについて課題研究発表を行い、論文集を作成した。発表を授業

## はしがき

“教師が教え学生が学ぶ”、“教師が学生の成績を評価する”——これらは、長い間日本の大学で行われてきた。さらに、最近、一部の大学では“学生が教師を評価する”ことも行われ始めた。

しかし、この「学習教授評価法」の講義では、やや異なる視点からこれらの問題に取り組んでみた。それは、教師も学生も授業への参加を通して学習、教授、評価を体験することであった。

そのための重要な活動として、課題研究発表を企画した。そこでは、学生が教師役となって自分の研究課題について発表し、他の受講生と私が学生として参加した。また、私の講義を含む毎回の授業では、教授活動と学習活動に関する評価を行った。同時に、授業のビデオ記録を撮り、自己の授業を振り返る手だてとした。

この『課題研究論文集』は、これらの成果をまとめたものである。課題研究発表は専門の異なる学生達の交流の場となったが、その共有財産ということが出来る。今日、大学改革の流れの中で、授業改善への関心が高まっている。そこではしばしば、教師の一方的な授業や学生の受身的な態度などが問題にされる。

しかし、この授業では、受講生は、各発表に対して積極的に質問し、活発な討論が行われた。また、教師の用意したさまざまな課題に真剣に取り組み、共同で問題解決にあたった。

まさに、参加者全員による“学びの共同体”が形成されていたとあって良い。

こうして、学生と教師が主体的に参加することによって、この授業をより良いものにしようとしてきたのである。これらの経験が受講生の皆さんの今後の研究と教育に役立つことを願ってやまない。

2002年7月25日

伊藤秀子

### 図1 課題研究発表の概要

に見立て、専門外の学習者にわかりやすく説明するよう指示した。その概要は、図1に示すとおりである（W2002、『課題研究論文集』より）

## 2.5 総括的評価

授業の最終回に実施した。詳細は、付録4を参照。

## 2.6 結果と考察

### 2.6.1 学習活動に関する有益度

授業の総括的評価のひとつとして、授業で行った活動が学習にどのくらい役立ったかを4段階評価でたずねた。図2は、7クラスに共通した活動について平均有益度を求めた結果である（N=63）。ビデオの自己視聴、課題研究発表が上位2位にあげられている。講師（教師）の話はそれよりも低い3位である。

本研究の対象授業は学生参加型授業を意図してデザインされているが、この結果は、授業の目的が達成されたことを示している。

Johnson (1994) は、オープン・アンド・フレキシブル・ラーニングにおいては、教師の役

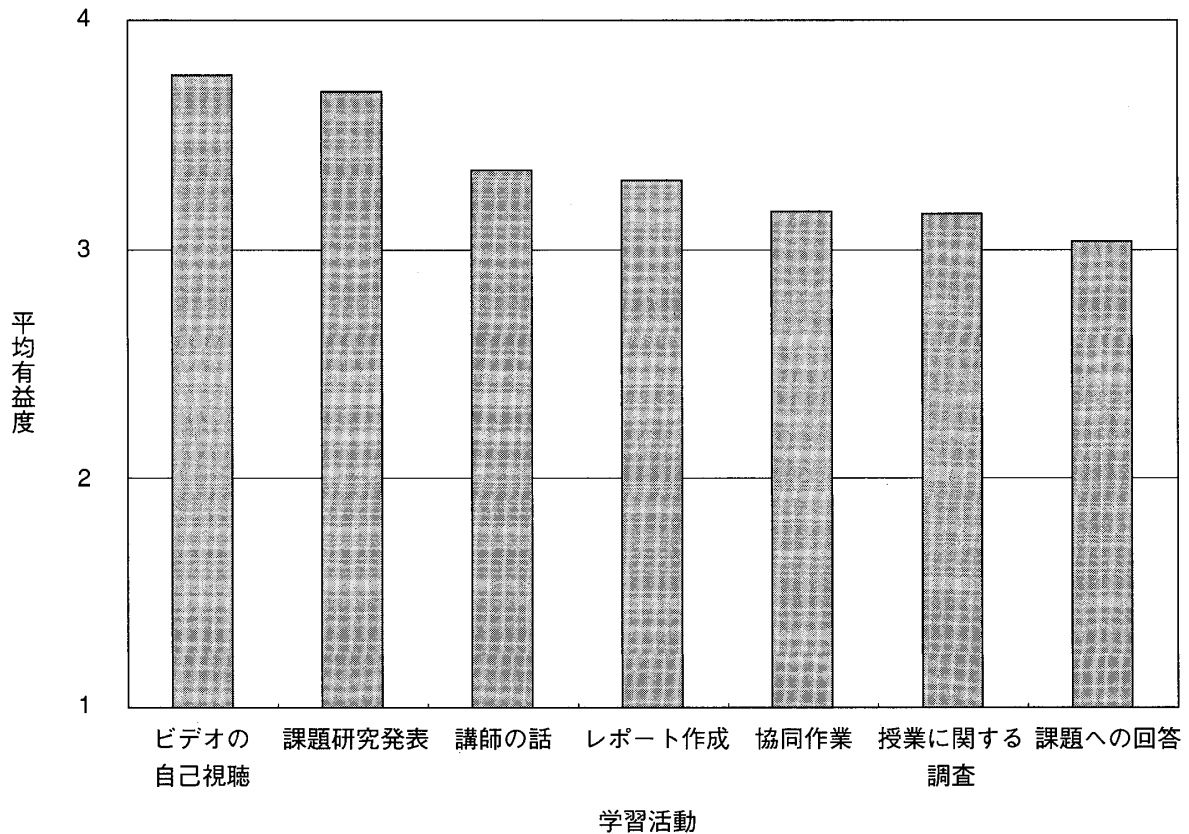


図2 学習活動に関する有益度

割は、知識の情報源から学習を管理したり促進したりすることによって変わっていくことを指摘している。このことから、本研究で実践された方法は、柔軟な学習形態の支援にも適用可能であることが示唆される。

### 2.6.2 授業改善の方法に関する情報源

学生を対象とした授業に関する調査（教授者用）の一環として、授業改善の方法を箇条書きにさせ、その記述内容の情報源をたずねた（複数回答可能）。図3は、各項目が情報源として選択された数を示している（ $N=53$ ）。第1位は、授業のビデオ記録である。本研究では、大学授業の改善に主体的にかかわっていく方法のひとつとして、ビデオ記録によって教授者の自己モデリングの手段とすることを試みた。この結果は、ビデオ記録が確かに改善の方法として使われていることを裏づけている。

また、第2位には、教授活動に関する学習者評価があげられている。このことは、学生たちが、自分の授業を改善する方法として、仲間の学生や教師の意見を取り入れようとしていることを示している。

評価の自由記述欄を見ると、全体として、良かった点を適確に評価していた。また、同じことを表現するにも、“こうするともっと良くなるだろう”というように、改善に役立つ具体的な提案が見られた。

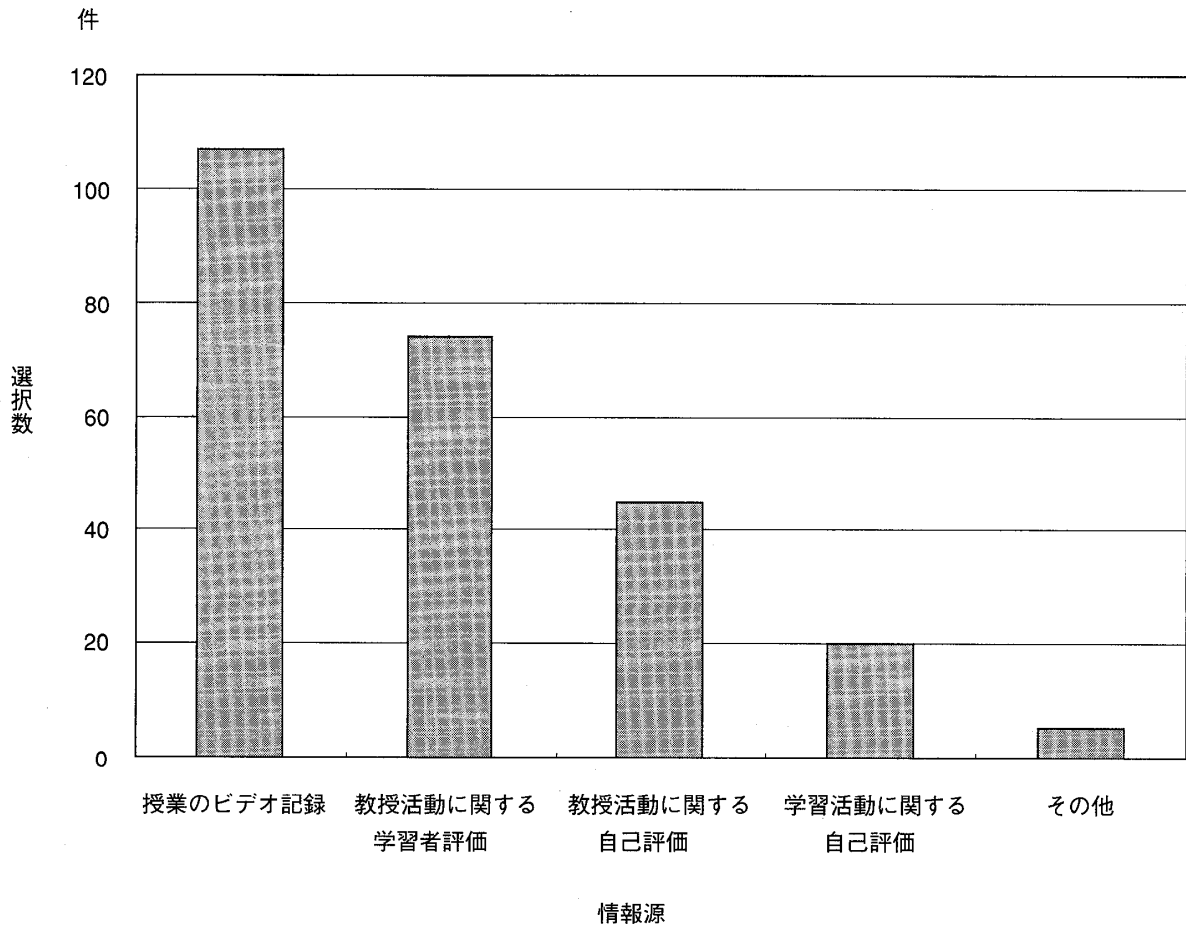


図3 授業改善の方法に関する情報源

Jourden (1992) は、他者からの社会的評価が課題達成の自己効力に与える影響について調べている。同じ達成基準について、すでにできた部分に注目させる場合（達成フィードバック）と、まだできていない部分に注目させる場合（欠如フィードバック）とを比較した。その結果、達成フィードバック群の被験者は、欠如フィードバック群の被験者に比べて、高い自己効力感を維持し、満足感が高く、次第に難しい目標に挑戦するようになり、高い生産性をあげたことが明らかにされた。このことから、本研究における評価も、「人を育てる評価」の効果を持っていたと考えられる。

以上のように、この授業は、専門の異なる学生たちや教師が交流し、互いに高めあっていく“学びの共同体”の形成に役立ったといえる。

### 2.6.3 ビデオの自己視聴により気づいた点

W1998では、ビデオの自己視聴結果をグループでまとめて発表させた。結果は、表2のとおりであった。これらの記述から、学生たちが、自分をモデルとして、良い点を伸ばし、悪い点は修正しようとしていることがわかる。



表2 ビデオの自己視聴により気づいた点

<グループA> (N=3)	
I. 授業設計	<ul style="list-style-type: none"> <li>・説明が整理不足</li> <li>・時間配分の悪さ</li> <li>・内容の重複</li> </ul>
II. 教材利用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポインターの効果的利用</li> <li>・機材の配置</li> <li>・教材を実際に触れてもらう方がよかった。</li> </ul>
III. 教授行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もっとはっきりと大きな声で、発音を明確に。</li> <li>・メモを読みながら話している。</li> </ul>
IV. その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問に対応しながら、片付け始めていた。</li> </ul>
<グループB> (N=2)	
I. 授業の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・難しい内容をいかに具体例を用いてわかり易く説明するか。</li> <li>・OHPの枚数を多くし、教授者に注意を集中させる。</li> <li>・授業に集中してもらうために、声を大きく、語調もしっかりと話す。</li> </ul>
II. ビデオ視聴後の反省点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表内容を良く理解しておく。つまり、あやふやな所を無くしておく。</li> <li>・ポインターの使い方には注意する。なるべく、同じ箇所をしつこいくらい指すと良い。</li> <li>・身体を前後にゆらしすぎない。つまり、自分の行動のクセを露出しない。</li> <li>・OHPやPower Pointを使用する際は、一ページに対する字数を少なめにし、フォントを大きくする。</li> <li>・質問を受講者にする際、ある程度、間を持たせる。</li> </ul>
III. 良かった点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・時間配分</li> <li>・受講者から注意をひきつける。</li> </ul>

#### 2.6.4 教授者の自己効力、自己評価、学習者の自己効力、教授活動評価、学習活動自己評価の関連

クラスごとに、教授者の自己効力、自己評価、学習者の自己効力、教授活動評価、および学習活動自己評価の関連を調べた。図4はこのうち、W2002の5回分の授業を合計した結果である。いずれも相関が有意であり、それぞれ無関連とはいえない。

##### (1) 教授者（教師）の教授活動自己効力と自己評価

教授者は、授業実施前に教授活動の自己効力を測定し、実施後に教授活動の自己評価を行った。両者の相関係数は $r = .850$ であり ( $p < .01$ )、対応しているといえる。

教授者は、授業実施後に教授活動を自己評価し、その後、ビデオ記録の視聴前後に、同じ授業を来週同じ大学で行う場合の自己効力を評定した。自己評価得点とビデオ視聴前自己効力得

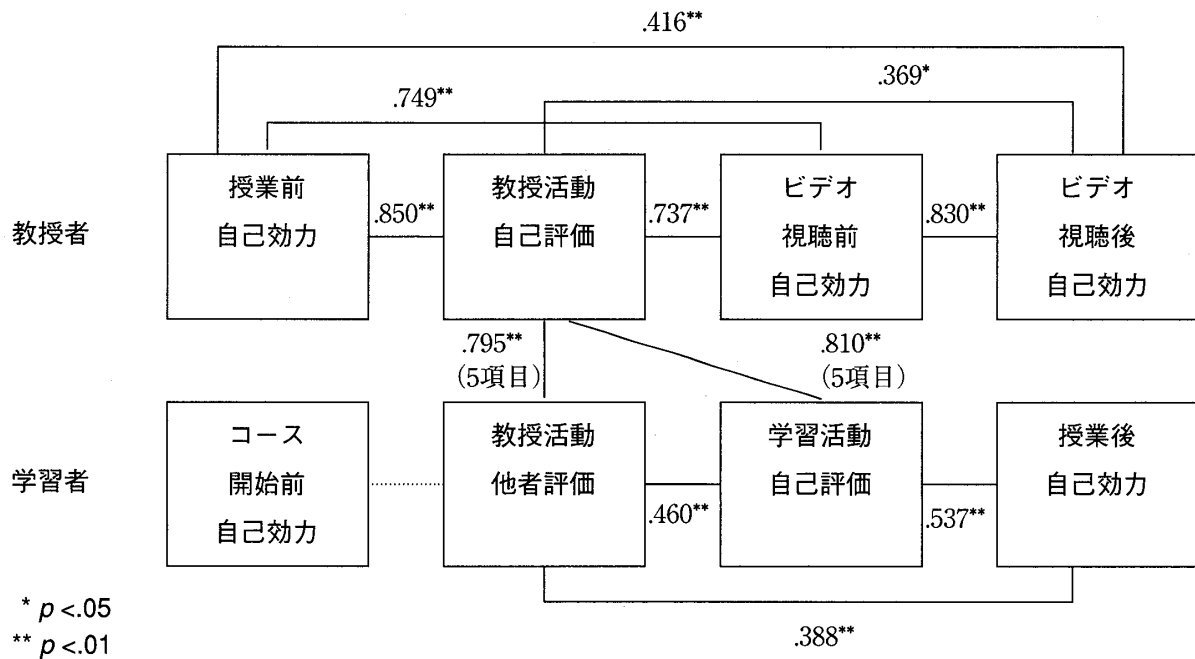


図4 教授者の自己効力、自己評価、学習者の自己効力、教授活動評価、学習活動評価の関連

点との相関係数は $r = .737$ であった ( $p < .01$ )。自己評価得点とビデオ視聴後自己効力得点との相関は $r = .369$ であった ( $p < .05$ )。教授活動の達成感が高いほどつぎの遂行への効力感が高まるといえる。

Bandura (1977) は、行動がうまくできるかどうかの確信がどのようにして生まれるかについて、4つの主要な情報源をあげている。(a) 行動の達成、(b) 代理経験 (他者の行動の観察)、(c) 言語的説得、(d) 情動喚起 (生理的状態) である。このうち、行動の達成、つまり、自分自身が直接やってみてできたという経験を持つことが最も効果的とされている。本研究の結果は、これらの情報源のうち、行動の達成経験の効果とみることができる。また、自己評価とビデオ視聴後自己効力との相関は、行動の達成経験とビデオ視聴による自己の行動の代理経験 (自己モデリング) の効果とみることができる。

### (2) 授業前自己効力とビデオ視聴前後の自己効力

授業実施前自己効力得点とビデオ視聴前の自己効力得点との相関係数は $r = .749$ であり ( $p < .01$ )、ビデオ視聴後の自己効力得点との相関係数は $r = .416$ である ( $p < .01$ )。また、ビデオ視聴前後の自己効力得点の相関係数は $r = .830$ である ( $p < .01$ )。もともと自己効力の高い人ほど、授業のビデオ記録の視聴前や視聴後にもそれを維持しているといえる。

### (3) 教授者の教授活動 (教師) 自己評価と学習者 (学生) の評価

教授活動に関する教授者の自己評価得点と学習者の評価得点との相関係数は $r = .795$ である ( $p < .01$ )。ここでは、内容的に対応のある5項目 (6 - 10) のみについて算出した。また、教授活動の自己評価得点と学習活動の自己評価得点との相関係数は $r = .810$ である ( $p < .01$ )。このように、教授者の自己評価、学習者の他者評価、および自己評価は対応している。

#### (4) 学習者（学生）の教授活動（教師）評価、学習活動自己評価、および自己効力

学習者の教授活動評価得点と学習活動評価得点との相関係数は $r = .460$ である ( $p < .01$ )。ここでは、内容的に対応のある5項目（6 - 10）のみについて算出した。学習者の教授活動評価得点と授業後自己効力得点との相関係数は $r = .388$ である ( $p < .01$ )。学習活動の自己評価や自己効力が高いと、教授活動に対する評価も高くなる。逆に、学習活動の自己評価や自己効力の低い人は、教授者に対しても厳しい評価をしているといえる。

#### (5) 学習者（学生）の学習活動自己評価と自己効力

学習者は、授業実施後に学習活動を自己評価し、その後、授業の最後に、次回の授業における自己効力を評定した。自己評価得点と自己効力得点との相関係数は $r = .537$ である ( $p < .01$ )。学習活動の達成感が高いほどつぎの遂行への効力感が高まるといえる。

### 2.6.5 学生と教師の総括的評価の関連

総括的評価のひとつとして、30項目について学生と教師が同じ項目を4段階で評価し、比較した。

表3は、W2002の学生の平均評価得点と教師の評価得点、およびそれらの差（学生の平均評価得点 - 教師の評価得点）を示している ( $N=18$ )。学生の評価得点の方が高い項目（+）の上位3位には、「14. 学生の方に視線を向けて話した。」「15. ユーモアのある授業だった。」「18. 学生の協同作業を積極的にすすめた。」があげられている。これらは、教師が思っているほど学生の評価は低くないことを示す。

一方、教師の評価得点の方が高い項目（-）の上位3位には、「21. 学生個人の問題意識や感情に理解があった。」「27. 授業を充実させようとする努力や工夫があった。」「19. 学生の発表や討論を積極的にすすめた。」があげられている。これらの項目については、今後の授業改善を考える際に特に注意する必要がある。

### 2.6.6 学生評価の教師への影響

#### (1) 形成的評価

毎回の授業で形成的評価を行った。教師と学生が同じ項目について評価し、その違いを比較してつぎの授業に役立てようとした。しかし、改善のために自由記述欄の悪い点に注目するため、だんだん授業が萎縮してしまった。全体としては肯定的な意見が多くても、たった1人の否定的な意見ばかりが気になってしまったのである。これは、授業の経験年数を重ねることによってある程度慣れてきた。

#### (2) 総括的評価

自由記述欄につぎのような感想があった。

「これほど熱意をもって授業をしてくださった先生は学部時代から考えても思いあたらない。たいへんだったが、終ってみれば充実感がある。本当にありがとうございました。」(W1998)

このときは、たった1人の意見であったにもかかわらず、胸が熱くなり、努力が報われた満足感を味わった。

同時に、つぎのように考える。“人は教えられたように教える”といわれるように、教師は

表3 総括的評価における学生と教師の評価得点の差 (W2002)

	学生評価 平均値 (L)	学生 標準偏差	教師評価 得点 (I)	差 (L-I)
1. 授業内容は、構造化され体系立てられていた。	3.056	0.416	2	1.056
2. 内容は精選されていた。	3.167	0.618	3	0.167
3. 内容は明快で理解しやすかった。	2.944	0.639	2	0.944
4. 内容は興味深かった。	3.611	0.608	3	0.611
5. 担当教科についての十分な知識が提供された。	3.056	0.802	2	1.056
6. 授業はよく準備されていた。	3.778	0.548	3	0.778
7. 授業の目標、課題を明確に示した。	3.389	0.502	3	0.389
8. 重要な教材や参考書を紹介した。	3.000	0.840	2	1.000
9. 印刷物を有効に利用していた。	3.333	0.686	2	1.333
10. 板書や提示資料は見やすかった。	3.222	0.808	3	0.222
11. 電子メディアを効果的に利用していた。	3.389	0.698	3	0.389
12. よく聞き取れる話し方だった。	3.222	0.808	2	1.222
13. 身振り、表情などの使い方が効果的だった。	2.556	1.042	1	1.556
14. 学生の方に視線を向けて話した。	3.667	0.485	2	1.667
15. ユーモアのある授業だった。	2.667	0.686	1	1.667
16. 学生自身に考えさせる工夫がなされていた。	3.889	0.323	4	-0.111
17. 学生が参加する適度な課題が含まれていた。	3.722	0.575	4	-0.278
18. 学生の協同作業を積極的にすすめた。	3.611	0.608	2	1.611
19. 学生の発表や討論を積極的にすすめた。	3.611	0.698	4	-0.389
20. 学生の質問や意見によく対応した。	3.500	0.618	2	1.500
21. 学生個人の問題意識や感情に理解があった。	3.389	0.608	4	-0.611
22. 学生から学ぼうとする態度があった。	3.667	0.485	4	-0.333
23. 授業からよい知的刺激を受けた。	3.556	0.511	3	0.556
24. 授業から多くのものを学んだ。	3.556	0.511	3	0.556
25. 教師の意見や行動に共感するものがあった。	3.056	0.873	2	1.056
26. 進んで出席したくなる授業だった。	3.222	0.808	3	0.222
27. 授業を充実させようとする努力や工夫があった。	3.500	0.618	4	-0.500
28. 自分の知識や常識を覆すインパクトがあった。	2.500	0.924	1	1.500
29. 情熱をもって授業をした。	3.278	0.669	3	0.278
30. 授業には総合的に満足である。	3.444	0.705	3	0.444

教授法に関する学生のモデルでもある。このような方法が、本授業の学生たちが大学で教える立場になった時に継承されていくことを望むものである。

この授業は、教師（筆者）にとっても学習、教授、評価を体験する貴重な機会であった。

### 3. まとめと展望

以上のように、本研究の方法は、学習者と教授者が大学の授業改善に主体的に関わっていくのを支援する方法として有効である。

支援の方法としては、さらに、つぎのようなことが考えられる。

### 3.1 教授者支援の方法

上記のように、教授者の役割が、知識の伝達から学習の管理者や推進者に変化することが考えられる。したがって、伝統的な一方的講義に慣れた教師に対し、さまざまな支援が必要である。たとえば、学習者の主体的な参加を促すための授業内活動の事例集の提供、メディアの効果的な利用に関する研究と実践結果の提供などである。

### 3.2 学習者支援の方法

学習者に対しては、主体的学習を支援する手だてが必要である。

上にのべたような教授法の改善は、学習者の受身的な学習態度を積極的な学習態度に変容させるのに影響を与えるであろう。

また、Collis (1999a) は、WWWを利用したコース開発において、学習者の役割も変化していくことを指摘している。それは、学習者を単なる知識の受容者ではなく、マルチメディア教材のプロデューサーと考える視点である。学習者は課題への回答をWebに書き込み、教授者がフィードバックしたり、学習者同士で評価を行ったりする。これらはデータベース化され、教材として再利用される。

このような観点から、本研究の『課題研究論文集』も、Webに載せ、教材化してはどうかとの示唆をいただいた (Collis, 1999b)。今後の課題として貴重なご意見である。

今日の情報技術革命は、高等教育にもますます多様な変革をもたらすだろう。その際に重要なことは、学習者と教授者が主体的に参加し、共同でより良い授業を構築していくことである。

### 引用文献

- 安彦忠彦 (研究代表者) (1991). 大学の授業方法・形態の改善と充実—教育研究学内特別経費報告書—, 名古屋大学教育学部, 1-94.
- Bandura, A. (1965). Vicarious processes: A case of no-trial learning. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. II. New York: Academic Press. pp.1-55.
- Bandura, A. (1986). *Social foundations of thought and action: A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.
- Collis, B. (1999a). *New directions in multimedia*. Lecture at the National Institute of Multimedia Education, Chiba, Japan.
- Collis, B. (1999b). Personal communications.
- 藤田哲也編著 (2003). 大学基礎講座 北大路書房
- Itoh, H. (1992). Relationship between academic self-efficacy and performance in a university course: A case study of a second language learner. Paper submitted to Professor Bandura as a term paper for his Seminar in Behavior Change, Department of Psychology, Stanford University, 1-20.
- 伊藤秀子 (1993). 視聴覚メディアによる認知・学習過程の基礎研究 放送教育開発センター研究報告, 第61号, 65-79.
- 伊藤秀子 (1995). 映像教材における教授法と視聴反応の分析 放送教育開発センター研究報告, 第83号, 79-136.
- 伊藤秀子 (1996a). 授業実践に関する調査 (I) 放送教育開発センター研究報告, 第93号, 3-28.

- Itoh, H. (1996b). Analyses of teaching methods and viewers' responses in telecourses. In F.Y. Doré (Ed.), *Abstracts of the XXVI International Congress of Psychology, Montréal, Canada, International Journal of Psychology*, 31, 140. Psychology Press.
- 伊藤秀子 (1996c). 大学授業における自己効力 (I) —学習者の自己効力、目標設定、能力観、成績の関連— 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 415.
- 伊藤秀子 (1997a). 授業実践に関する調査 (II) 放送教育開発センター研究報告, 第103号, 3-19.
- 伊藤秀子 (1997b). 大学授業研究への新しいアプローチ—教授者と学習者の主体的参加をめざして— 京都大学高等教育研究, 第3号, 98-107.
- 伊藤秀子 (1997c). 大学授業における自己効力 (II) —教授者の自己効力、目標設定、学習者の評価の関連— 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 505.
- 伊藤秀子・大塚雄作編著 (1999). *ガイドブック大学授業の改善* 有斐閣
- 伊藤秀子・魚崎祐子・浅輪一郎・八木慶太郎・山本裕子・波多野和彦 (2001). プリゼンテーションの改善法—自己モデリング、自己効力、自己評価の分析— 日本教育工学会第17回全国大会講演論文集, 673-674.
- 伊藤秀子・魚崎祐子・山本裕子・中島 透・波多野和彦 (2002). プリゼンテーションの改善法 (II) —自己モデリング、自己効力、自己評価の分析 (その2) — 日本教育工学会第18回全国大会講演論文集, 699-700.
- Johnson, R. (1994). *Open learning: Policy and practice*. National Board of Employment Education and Training. Commissioned Report No. 4. AGPS, Canberra, ACT. (Cited from Latchem, 1998.)
- Jourden, F.J. (1992). The influence of feedback framing on self-regulatory mechanisms: A grass half full or half empty? Manuscript submitted for publication.
- 京都大学高等教育教授システム開発センター編 (1997). 開かれた大学授業をめざして—京都大学公開実験授業の一年間— 玉川大学出版部
- 京都大学高等教育教授システム開発センター編 (2001). 大学授業のフィールドワーク—京都大学公開実験授業— 玉川大学出版部
- 京都大学高等教育教授システム開発センター編 (2002). 大学授業研究の構想—過去から未来へ— 東信堂
- 教養の心理学を考える会編 (2002). *素朴な心のサイエンス* 北大路書房
- Latchem, C. (1998). Distance, open and flexible learning and technology: The Australian experience. *Educational Technology Research*, 21, 39-47.
- 三尾忠男編 (2000). 大学授業の自己改善法—1998年度授業改善の実践報告— メディア教育開発センター研究報告, 第14号
- 三尾忠男編 (2001a). 大学授業の自己改善法—1999年度授業改善の実践報告— メディア教育開発センター研究報告, 第21号
- 三尾忠男編 (2001b). かわる学生・かわる大学—学習支援の実践と課題— メディア教育開発センター研究報告, 第22号
- 三尾忠男編 (2001c). かわる学生・かわる大学—FD (ファカルティ・ディベロップメント) と授業改善— メディア教育開発センター研究報告, 第23号
- R.J. スタンバーグ編著, 宮元博章・道田泰司編訳 *アメリカの心理学者心理学教育を語る* 北大路書房
- Taylor, P.G., Lopez, L., and Quadrelli, C. (1996). *Flexibility, technology and academics' practices: Tantalising tales and muddy maps*. Higher Education Division, Department of Employment, Education, Training and Youth Affairs, Evaluations and Investigations Program, Canberra, Australian Government Publishing Service. (Cited from Latchem, 1998.)
- 和光大学授業研究会編 (1996). *語り合い見せあい大学授業* 大月書店

## 謝辞

本研究データの処理について、魚崎祐子さん（メディア教育開発センター特別共同利用研究員）にお手伝いいただいた。記して感謝の意を表したい。

<付録1>

### 授業に関する調査（学習者用）

この調査は授業をより良くするためのものです。あなたが受講している授業についてつぎの質問にお答えください。回答が成績に影響したり、個人名で公表されることはありません。

つぎの各欄に必要な事項を記入してください。

所属： \_\_\_\_\_ 学年 \_\_\_\_\_ 番 \_\_\_\_\_

氏名： \_\_\_\_\_ 性別： 男 女

回答日：平成 \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

科目名： \_\_\_\_\_

#### 学習活動に関する遂行の確信度

次回の授業で、あなたはつぎの各項目をどの程度確信をもってできると思いますか。尺度を見て、最もあてはまる数値を各項目の右側の回答欄に記入してください。

確 信 度										
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全く					ある程度					確信をもって
できない					確信をもって					できると思う
と思う					できると思う					

1. 授業に注意を集中する。 \_\_\_\_\_
2. 内容をよく理解する。 \_\_\_\_\_
3. 重要なポイントをとらえる。 \_\_\_\_\_
4. 内容をよく覚える。 \_\_\_\_\_
5. 学習を深め、広げるための知識を得る。 \_\_\_\_\_
6. 自分で問題意識を持ち、考える。 \_\_\_\_\_
7. 課題に一生懸命取り組む。 \_\_\_\_\_
8. 協同作業に積極的に参加する。 \_\_\_\_\_
9. 発表や討論に積極的に参加する。 \_\_\_\_\_
10. 疑問点について質問する。 \_\_\_\_\_



<付録2>

授業に関する調査（学習者用）

この調査は、授業をより良くするためのものです。あなたが受講している授業についてつぎの質問にお答えください。回答が成績に影響したり、個人名で公表されることはありません。

つぎの各欄に必要事項を記入してください。

所属： 学年 番  
氏名： 性別： 男 女  
回答日：平成 年 月 日  
科目名：

(1) 教授活動に関する調査

つぎの各項目は、本時の授業についてのあなたの意見にどのくらいあてはまりますか。該当する記号を○で囲んでください。

評定： 4. あてはまる。 3. ややあてはまる。  
2. あまりあてはまらない。 1. あてはまらない。

- |                               |    |    |    |    |
|-------------------------------|----|----|----|----|
| 1. 授業の目標、課題を明確に示した。 .....     | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 2. 内容は精選されていた。 .....          | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 3. 内容は興味深かった。 .....           | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 4. メディアを効果的に利用していた。 .....     | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 5. 学生の方に視線を向けて話した。 .....      | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 6. 学生自身に考えさせる工夫がなされていた。 ..... | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 7. 学生が参加する適度な課題が含まれていた。 ..... | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 8. 学生の協同作業を積極的にすすめた。 .....    | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 9. 学生の発表や討論を積極的にすすめた。 .....   | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 10. 学生の質問や意見によく対応した。 .....    | 4. | 3. | 2. | 1. |

(2) 学習活動に関する調査

つぎの各項目は、本時の授業でのあなたの学習活動にどのくらいあてはまりますか。該当する記号を○で囲んでください。

評定： 4. あてはまる。 3. ややあてはまる。  
2. あまりあてはまらない。 1. あてはまらない。

- |                               |    |    |    |    |
|-------------------------------|----|----|----|----|
| 1. 授業に注意を集中できた。 .....         | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 2. 内容をよく理解できた。 .....          | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 3. 重要なポイントをとらえることができた。 .....  | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 4. 内容をよく覚えられた。 .....          | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 5. 学習を深め、広げるための知識が得られた。 ..... | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 6. 自分で問題意識を持ち、考えようとした。 .....  | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 7. 課題に一生懸命取り組んだ。 .....        | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 8. 協同作業に積極的に参加した。 .....       | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 9. 発表や討論に積極的に参加した。 .....      | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 10. 疑問点について質問した。 .....        | 4. | 3. | 2. | 1. |

(3) 総合評価

1. 授業には総合的に満足である。 ..... 4. 3. 2. 1.

(4) 本時の授業について、重要と思った点、印象に残った点、疑問点などを自由に書いてください。

<付録3>

授業に関する調査（教授者用）

この調査は、教授者が自分自身の教授活動をとらえることによって、授業をより良くするためのものです。あなたの担当授業についてつぎの質問に答えてください。

<回答方法>

P. 2 調査Ⅰ（授業実施前）

1. 授業を実施する前日に回答してください。

P. 3-4 調査Ⅱ（授業実施後）

1. 授業を実施した直後に回答してください。

P. 5-7 調査Ⅲ（ビデオ視聴後）

1. 授業終了後、できるだけ早い時期（遅くとも1週間以内）にビデオ記録を視聴してください。
2. ビデオ記録を視聴した直後に回答してください。
3. 学習者用調査（教授活動に関する評価、学習活動に関する評価、学習活動に関する遂行の確信度）は、ビデオ視聴後に参照して下さい。

所属名：

氏名：

性別：男 女

教育歴：1) 大学・短大（ 年）

2) その他（小、中、高、企業等）（機関種別                      ）（ 年）

計（ 年）

（1）担当授業に関する調査

項目1、4、7、9には必要事項を記入してください。

項目2、3、5、6、8は、該当する記号を○で囲んでください。

1. 科目名：

2. 系：a. 人文科学    b. 社会科学    c. 自然科学    d. 複合領域

3. 分野：a. 哲学    b. 心理学    c. 社会学    d. 教育学    e. 文化人類学  
f. 史学    g. 文学    h. 語学    i. 法学    j. 経済学    k. 商学  
l. 数学    m. 天文学    n. 物理学    o. 化学    p. 生物学  
q. 工学    r. 農学    s. 医学    t. 歯学    u. 薬学    v. 看護学  
w. 体育学    x. 教育工学    y. その他（                      ）

4. 当該科目の担当歴： 年

5. 形態：a. 講義    b. 演習    c. ゼミ    d. 実験    e. 実習  
f. その他（                      ）

6. 機関種別：a. 大学院    b. 大学    c. 高専    d. その他（                      ）

7. 対象：1) 学部・学科名等（                      ）  
2) 学年（                      ）

8. 種別：a. 必修科目    b. 選択科目

9. シラバス（または当該科目の目的）：

シラバスを添付してください。

## 調査 I (授業実施前)

回答日：平成 年 月 日

### (1) 担当授業に関する調査

1. 本時の学習目標：

2. 授業の工夫

本時の授業について、特に工夫している点はどのようなことですか。箇条書にして下さい。

### (2) 教授活動に関する遂行の確信度 I (授業実施前)

本時の授業で、あなたはつぎの各項目をどの程度確信をもってできると思いますか。尺度を見て、最もあてはまる数値を各項目の右側の回答欄に記入してください。

確 信 度										
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全く					ある程度					確信をもって
できない					確信をもって					できると思う
と思う					できると思う					

1. 授業の目標、課題を明確に示す。 \_\_\_\_\_
2. 内容を精選する。 \_\_\_\_\_
3. 学生の興味をひく内容を提示する。 \_\_\_\_\_
4. メディアを効果的に利用する。 \_\_\_\_\_
5. 学生の方に視線を向けて話す。 \_\_\_\_\_
6. 学生自身に考えさせる工夫をする。 \_\_\_\_\_
7. 学生が参加する適度な課題を含める。 \_\_\_\_\_
8. 学生の協同作業を積極的にすすめる。 \_\_\_\_\_
9. 学生の発表や討論を積極的にすすめる。 \_\_\_\_\_
10. 学生の質問や意見によく対応する。 \_\_\_\_\_

## 調査 II (授業実施後)

### (1) 担当授業に関する調査

1. 授業実施日時：平成 年 月 日 時 分～ 時 分
2. 実施場所：
3. 受講者数： 名
4. 参加形態：a. 情報受容 b. 演習 c. 実習 d. 発表 e. 討論  
f. レポート作成 g. テーマ選択 h. グループ活動 i. テューター  
j. その他 ( )
5. 使用メディア：a. 印刷物 b. 黒(白)板 c. スライド d. OHP e. VTR  
f. テープレコーダ g. コンパクトディスク h. CD-ROM  
i. コンピュータ j. その他 ( )
6. 学習者に関する資料：  
a. 教授活動に関する評価 b. 学習活動に関する評価 c. 学習活動に関する遂行の達成度  
d. 課題の回答 e. 理解度テスト f. 演習結果 g. 成績 h. レポート i. 作品  
j. その他 ( )

### (2) 教授活動に関する評価

1. つぎの各項目は、本時の授業についてのあなたの意見にどのくらいあてはまりますか。該当する記号を○で囲んでください。

評定：4. あてはまる。 3. ややあてはまる。  
2. あまりあてはまらない。 1. あてはまらない。

- |                               |    |    |    |    |
|-------------------------------|----|----|----|----|
| 1. 授業の目標、課題を明確に示した。 .....     | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 2. 内容は精選されていた。 .....          | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 3. 内容は興味深かった。 .....           | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 4. メディアを効果的に利用していた。 .....     | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 5. 学生の方に視線を向けて話した。 .....      | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 6. 学生自身に考えさせる工夫がなされていた。 ..... | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 7. 学生が参加する適度な課題が含まれていた。 ..... | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 8. 学生の協同作業を積極的にすすめた。 .....    | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 9. 学生の発表や討論を積極的にすすめた。 .....   | 4. | 3. | 2. | 1. |
| 10. 学生の質問や意見によく対応した。 .....    | 4. | 3. | 2. | 1. |

2. この授業について、気がついたこと、感じたことなどを自由に書いてください。

(3) 教授活動に関する遂行の確信度 II (授業実施後)

次回の授業であなたはつぎの各項目をどの程度確信をもってできると思いますか。尺度を見て、最もあてはまる数値を各項目の右側の回答欄に記入してください。

確 信 度

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全く できない と思う					ある程度 確信をもって できると思う					確信をもって できると思う

1. 授業の目標、課題を明確に示す。 \_\_\_\_\_
2. 内容を精選する。 \_\_\_\_\_
3. 学生の興味をひく内容を提示する。 \_\_\_\_\_
4. メディアを効果的に利用する。 \_\_\_\_\_
5. 学生の方に視線を向けて話す。 \_\_\_\_\_
6. 学生自身に考えさせる工夫をする。 \_\_\_\_\_
7. 学生が参加する適度な課題を含める。 \_\_\_\_\_
8. 学生の協同作業を積極的にすすめる。 \_\_\_\_\_
9. 学生の発表や討論を積極的にすすめる。 \_\_\_\_\_
10. 学生の質問や意見によく対応する。 \_\_\_\_\_

調査 III (ビデオ視聴後)

回答日：平成 年 月 日

(1) ビデオ記録に関する調査

- 1) ビデオ記録を視聴して気がついた点を箇条書きにしてください。[2. 以下は各自で番号をふって下さい。]
- 2) 項目番号欄：記述内容がp. 2に記した評価項目に対応する場合は、その番号を( )内に記入して下さい。評価項目以外の点について記述した場合は( )内は空欄にして下さい。
- 3) タイムコード欄：記述内容に対応する映像が特定できれば、タイムコードを記入して下さい(例 〇〇分〇〇秒-〇〇分〇〇秒)。

項目番号	タイムコード	気がついた点
1. ( )		

## (2) 担当授業に関する調査

### 1. 教授法への影響要因

当該科目に関して、あなたの教授法に影響を与えているのはどのようなことだと思いますか。つぎの中から、主要なものを3つまで選び、記号を○で囲んでください。

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| a. 大学(院)時代の学習経験    | b. 自己の教授経験         |
| c. 講演会、学会などでの発表経験  | d. 自己の授業の映像記録      |
| e. 大学(院)時代の教師の教授法  | f. 同僚の教授法          |
| g. 初等中等教育の教師の教授法   | h. 講演会・学会などでの他者の発表 |
| i. 教育番組、映像教材などの教授法 | j. 教育法関係の書物        |
| k. 学生の意見           | l. その他 ( )         |

### 2. 授業改善の方法

1) この授業をさらによくするために、どのような方法が考えられますか。箇条書きにしてください。

[2. 以下は各自で番号をふって下さい。]

2) 各記述内容に関する情報はつぎのどれから得ましたか。( )内に記号を記入して下さい。

[複数回答可能]

- 情報源: a. 教授活動に関する自己評価   b. 授業のビデオ記録  
c. 教授活動に関する学習者評価   d. 学習活動に関する評価  
e. その他 ( )

情報源      改善の方法

1. ( )

(3) 教授活動に関する遂行の確信度 III (ビデオ視聴後)

次回の授業で、あなたはつぎの各項目をどの程度確信をもってできると思いますか。尺度を見て、最もあてはまる数値を各項目の右側の回答欄に記入してください。

確 信 度											
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
全く					ある程度					確信をもって	
できない					確信をもって					できると思う	
と思う					できると思う						

1. 授業の目標、課題を明確に示す。 \_\_\_\_\_
2. 内容を精選する。 \_\_\_\_\_
3. 学生の興味をひく内容を提示する。 \_\_\_\_\_
4. メディアを効果的に利用する。 \_\_\_\_\_
5. 学生の方に視線を向けて話す。 \_\_\_\_\_
6. 学生自身に考えさせる工夫をする。 \_\_\_\_\_
7. 学生が参加する適度な課題を含める。 \_\_\_\_\_
8. 学生の協同作業を積極的にすすめる。 \_\_\_\_\_
9. 学生の発表や討論を積極的にすすめる。 \_\_\_\_\_
10. 学生の質問や意見によく対応する。 \_\_\_\_\_

(4) この調査に関する意見、感想などを自由に書いてください。

(ご協力ありがとうございました。)





## (2) 学習活動に関する調査

つぎの各項目は、この授業全体を通してのあなたの学習活動にどのくらいあてはまりますか。該当する記号を○で囲んでください。

評定：4. あてはまる。 3. ややあてはまる。  
2. あまりあてはまらない。 1. あてはまらない。

1. 授業に注意を集中できた。 .....	4.	3.	2.	1.
2. 内容をよく理解できた。 .....	4.	3.	2.	1.
3. 重要なポイントをとらえることができた。 .....	4.	3.	2.	1.
4. 内容をよく覚えられた。 .....	4.	3.	2.	1.
5. 学習を深め、広げるための知識が得られた。 .....	4.	3.	2.	1.
6. 自分で問題意識を持ち、考えようとした。 .....	4.	3.	2.	1.
7. 課題に一生懸命取り組んだ。 .....	4.	3.	2.	1.
8. 協同作業に積極的に参加した。 .....	4.	3.	2.	1.
9. 発表や討論に積極的に参加した。 .....	4.	3.	2.	1.
10. 疑問点について質問した。 .....	4.	3.	2.	1.

## (3) 講義内容への関心度

(1) つぎの講義のうちあなたが出席した日を○で囲んで下さい。また、出席回数を〔 〕内に記入してください。

(2) 内容についてどう思いましたか。該当する番号を〔 〕内に記入して下さい。その理由も書いてください。出席回数ゼロの場合は無記入にして下さい。

### 1. 学習・教授・評価の関連

(1) 出席日：4/18 4/25

出席回数〔 〕

(2) 評定：4. 非常に興味深い。 3. やや興味深い。  
2. あまり興味深くない。 1. 全く興味深くない。

回答〔 〕

理由：

### 2. オープンフィールド・アプローチによる教育研究と実践

(1) 出席日：7/4 7/11

出席回数〔 〕

(2) 評定：4. 非常に興味深い。 3. やや興味深い。  
2. あまり興味深くない。 1. 全く興味深くない。

回答〔 〕

理由：

### 3. 教育評価

(1) 出席日：7/11 7/18

出席回数〔 〕

(2) 評定：4. 非常に興味深い。 3. やや興味深い。  
2. あまり興味深くない。 1. 全く興味深くない。

回答〔 〕

理由：

#### (4) 学習への有益度

つぎのことがらは、あなたの学習にどのくらい役に立ったと思いますか。該当する番号を〔 〕内に記入してください。その理由も書いて下さい。

##### 1. 講師の話

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

##### 2. 課題への回答

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

##### 3. 協同作業

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

##### 4. 課題研究発表（教授者として）

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

##### 5. 課題研究発表（学習者として）

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

##### 6. 授業に関する調査（教授者として）

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

##### 7. 授業に関する調査（学習者として）

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
          2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答〔 〕

理由：

8. ビデオ記録の自己視聴

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
           2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答 [       ]

理由：

9. レポート作成

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
           2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答 [       ]

理由：

10. 印刷物

- 評定：4. 非常に役に立った。                      3. やや役に立った。  
           2. あまり役に立たなかった。            1. ほとんど役に立たなかった。

回答 [       ]

理由：

(5) 学習活動に関する遂行の確信度

同じようなテーマの授業を来年度受けるとしたら、あなたはつぎの各項目をどの程度確信をもってできると思いますか。尺度を見て、最もあてはまる数値を各項目の右側の回答欄に記入してください。

確信度									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
全く				ある程度					確信をもって
できない				確信をもって					できると思う
と思う				できると思う					

1. 授業に注意を集中する。 .....
2. 内容をよく理解する。 .....
3. 重要なポイントをとらえる。 .....
4. 内容をよく覚える。 .....
5. 学習を深め、広げるための知識を得る。 .....
6. 自分で問題意識を持ち、考える。 .....
7. 課題に一生懸命取り組む。 .....
8. 協同作業に積極的に参加する。 .....
9. 発表や討論に積極的に参加する。 .....
10. 疑問点について質問する。 .....

(6) この授業についての感想を自由に書いてください。

(ご協力ありがとうございました。)